

書評

勁草書房1989年

野村 昭 『俗信の社会心理』

沼田 健 哉

野村昭氏は、日本の代表的な社会心理学者の一人であり、社会的偏見や俗信をその主たる研究課題としてきた研究者である。氏は、G・W・オルポートの『偏見の心理』やJ・M・ジョンズの『人種関係の心理学』の翻訳者でもあり、かつて『俗信と偏見』という小冊子を著わしている。その本は、野村氏が島根大学に奉職中に研究した、山陰地方に伝わる憑きもの（キツネモチ）俗信について書いたものである。『俗信の社会心理』は、前著と骨子と論点はほとんど変わらないものの、より社会心理学の立場からの理論化を進め、事例においても、前著以降にインフォーマントから蒐集したものを多く収録するよう心掛けたものである。当書の構成は以下のようになっている。

第1部 俗信の心理機制の研究

1. 俗信の意味
2. 俗信へのアプローチ
3. 非合理的行動としての俗信
4. 児童の因果観と俗信
5. 「原因推論のバイアスや誤り」としての俗信
6. 所信体系の一環としての俗信
7. 俗信維持の社会・文化的要因

第Ⅱ部 憑きもの俗信の社会心理——エミック・アプローチ——

1. 憑きものの意味
2. 憑きものの俗信の実態（出雲・伯耆・隠岐における）
3. 憑きものの俗信の略史
4. 憑依現象としての憑きものの俗信を支える要因
5. 社会的偏見としての憑きものの俗信を支える要因
6. 憑きものの俗信に対する態度の発達
7. 要約と結語

以上のように、第Ⅰ部は、これまでの社会・心理学的資料に基づいて、俗信の心理機制についてまとめたものであり、第Ⅱ部は、エミックな観点（地域限定的にその地域社会・文化の内側から問題探究をしようとする研究の観点）からのキツネモチ俗信研究である。

氏は、第Ⅱ部において、エミックな観点に立ってキツネモチ俗信を研究しようとした理由をいくつかあげているが、とくに以下のものは重要である。

(1) 現在の社会心理学での資料蒐集があまりにも恣意的で、被験者の社会文化的背景を捨象して、集め易いところから資料を集めているにすぎないことが多いと思われること。

(2) 現在の日本の社会心理学では、米国で問題となった実験や調査等の追試は非常に盛んに行なわれているが、それに比べれば、日本での問題の把握や記述があまりにも少ないと思われること。

この記述は、氏の俗信研究の背景をなす事由であり、日本における社会心理学の現況からみて、こうしたエミックな観点からする研究は重要な意義をもつということができよう。

氏は、まず「俗信とは、科学的な検証を経ていないにもかかわらず、ア・プリオリに信じられている知識・技術・因果観である」と定義する。ついで、幾人かの社会学者や心理学者の俗信や迷信についての所説を通覧し、以下のような共通した視点を見出している。

- (1) 俗信や迷信は、決してわれわれとは無縁の異様な世界の出来事として

考えるべきではなく、むしろ誰もが陥り易い一般的事象であると考えられる。

(2) したがって、俗信や迷信を支える要因を、無知蒙昧や時代錯誤に求めるのではなく、誰でもが経験する一般的な人間の動機、不安解消、思考様式などの個人的要因、社会的慣行、社会的規範、社会的強制力などの社会的要因に求めることが必要である。

ついで、研究を進めるにあたり、二つの主要な観点や立場があるとして、エティックな観点とエミックな観点をあげている。エティックな観点とは、研究対象の外側からの一般的・普遍的な行動研究の観点であり、エミックな観点に立つ研究とは、対象の内側からの特定の・限定的な行動研究である。

氏は、この二つのアプローチは、お互いにその長所・短所が相補い合う関係にあるとみなしているが、現今の社会心理学の領域において、あまりにもエミック・アプローチをとった研究が少なすぎるという跛行的状況があるという指摘を行なっている。

氏は、行動心理学の立場から、迷信を取り上げ実験的研究を行なった学者として、スキナーをあげ、その研究を批判的に検討している。スキナーの言及の不的確さには驚くべきものがあり、迷信に関し、きわめて高レベルの研究を行なったヤホダのスキナー批判は、氏の指摘するとおり、適切なものといえることができる。

ついで、個人が因果関係をどのように認知しているかという問題に関連し、ピアジェの「児童の世界観」の研究や、「原因推論過程」についての諸研究を検討の対象としている。「原因推論のバイアスや誤り」としての俗信への言及の後には、認知の世界における広汎な所信体系の一環として俗信を位置づけ、論考を加えている。個人のパーソナリティの特質としての権威主義的傾向と俗信（迷信）、保守主義的傾向と俗信（迷信）、教条主義的傾向と俗信（迷信）の各関連性が論じられている。

しかし、俗信維持の要因を、個人のパーソナリティ要因にのみ帰することはできないとして、今まで社会心理学において研究されてきた俗信維持の社

会・文化的要因と思われるものの幾つかについても言及している。とくに、マートンの理論による俗信の「潜在的機能」の果す役割に注目し、くわしく迷っている。

以上が、第Ⅰ部の内容の概略であり、俗信に関連する社会心理学の諸理論が網羅的に検討の対象とされている。これらの言及は、それなりの存在意義をもつといえるものの、たとえば、ヤホダの『迷信の心理学』にみられるような、オリジナルな視点が提示されているとはみなしがたい。

「第Ⅱ部 憑きもの俗信の社会心理」においては、主として民俗学による研究成果を参照しつつ、エミック・アプローチによる言及がなされている。その論述の内容は、野村氏によって以下のように要約されている。

(1) キツネモチ俗信は、憑依現象（憑依信仰）と社会現象（社会的偏見）の二面性をもって立ち表れている。

(2) 出雲・伯耆・隠岐での当該コミュニティの大半の人たちの所信としては、憑依信仰は形骸化し、実質はキツネモチ家筋の人との通婚を忌避・拒否する社会的偏見や差別の問題となっている。

(3) しかし、キツネモチ俗信についての意見や態度の表明を求められた場合、多くの人々が「キツネが人にとり憑くなどあり得ない」などの憑依信仰の否定に終始する傾きがある。

(4) キツネモチ家筋についてのステレオタイプには、「彼等は金持ちである」という所信が広まっている。これは、キツネモチ家筋の発生にあたっての歴史的所信ではあるが、現在では必ずしも事実ではない。ここでも、その理由づけとして「キツネが金をくわえてきて富裕になった」などの憑依現象面の強調が行なわれている。

(5) 社会的偏見としてのキツネモチ俗信への態度の表明は、なかなか表面にはでてこない。公的場面と私的場面、意見と行動、自我関与の有無などによってその表明に背離がある。こうした態度の二重構造によって、一見存在しないかにみえる社会的偏見は支えられている。

(6) キツネモチ家筋との通婚の忌避や拒否は、当該コミュニティでの習俗規範となっている。そして、もしも通婚すれば、自らもキツネモチ家筋のレッテルを貼られ、忌避や拒否の対象とされてしまう。そのことが最大の忌避理由となっている。

(7) キツネモチ俗信への態度の発達過程をみると、年少者（小学三年頃）ではまだこの俗信について知識（所信）をもつ者も少ないが、知っている者は大半が情動否定的にこの俗信を受けとめている。年長になるにつれて（小学六年生頃）、情動否定的でない知識を取得するようになるが、自己の結婚が近づいてくると、習俗規範からの逸脱を恐れ、それに同調する傾向がみられる。

(8) この俗信の情動否定的な受容は、男子よりは女子の方がより年長になるまで多く見られる。また、現在では形骸化し少なくなってしまった憑依信仰としてのキツネモチ俗信の支え手も、女性の方が多い。

(9) この俗信についての知識源は、年少の頃は児童・生徒の周辺にいる家族や親戚の成人であること、および情動否定的にこの俗信について伝達されることが多いが、年長になると、家族や親戚のみではなく、この俗信に批判的、啓蒙的な授業やマス・メディアを通して学ぶことも多くなる。

(10) キツネモチ家筋の児童・生徒は、今日ではキツネモチ俗信についての知識を取得する機会が少なく、相当年長になるまで知らず、したがって家筋の自覚をもつのも遅い。しかし、結婚の時期が近づくとつれて、いやおうなく通婚の障害を自覚せしめられる。

氏は、さらにキツネモチ俗信に対する態度（偏見的态度）を変容せしめる対策に関し以下のように述べている。

(1) キツネモチ俗信は、憑依信仰の外観を示しているも、内実は社会的偏見問題の性格を備えていて社会的緊張をはらんでいる。これに対し、冷静に、感情的にならずに、率直に論議できることが重要である。

(2) この問題を情動否定的に自己の周囲の人、ことに児童・生徒に伝達し

ないことが肝要である。

(3) 学校の授業などで、人権問題の一環として、この俗信について学ばせることは望ましい。その場合も、家に帰って両親や祖父母に児童・生徒がこの俗信について問い掛けても、情動否定的な受け答えをしないことが大切である。

(4) 俗信は、科学が進歩し人智が開明されるにつれ自ずからなくなるという自然消滅論は正しくない。科学の成果をただ享受することが重要なのではなく、われわれが科学的な態度、科学的なものの考え方（所信）を真に身に付けることが重要なのである。

さらに、最後に偏見的態度に関連すると思われるわれわれの一般的な性向について述べている。すなわち、わずかばかりの手掛かりや指標によって人を評価する態度、既成の事実を当然だとして受け入れる態度、自己のみは偏見とは無関係だと考える態度が指摘されている。これらの態度や心の持ち方についての自覚・反省がないなら、キツネモチ俗信自体は微弱になっても、それに代わる機能的等価現象が表れる可能性があり、キツネモチ俗信自体も潜在化しているとみなすべきであり、完全に消滅しているのではないとする。

以上のように、第Ⅰ部は、俗信に関連した社会心理学の立場からの理論的考察であり、第Ⅱ部は、キツネモチ俗信を中心とする、憑きものに関するエミック・アプローチからのより実証的な言及である。しかし、第Ⅰ部での理論的考察が、第Ⅱ部のより実証的考察と有機的に結びついているわけではなく、相互の独立性は高いといえよう。したがって、第Ⅰ部での研究による分析枠組により、キツネモチ俗信が鋭利に分析されているとはみなしがたい。

さらに、憑きものに関する考察においても小松和彦・宮本袈裟雄らの最近の研究成果が生かされていず、1989年の出版にしては、ややオールドファッションである。

理論面においても、諸学説の折衷という形態をとっているためか、一貫した主張がなされているとは思われない。これは、ヤホダの『迷信の心理学』

が、「迷信を求める人間の性癖は決して根絶され得ないであろう。というのは、逆説的ではあるが、それは適応のメカニズムの不可欠な一部分だからであり、それなくしては、人類は生きていくことができないからである。」という主張によってつらぬかれているのとは対照的である。けれども、これは氏個人の欠点というよりは、日本の社会学者に共通にみられる現象である。日本には、欧米の一流の研究者に比肩できるようなオリジナリティをもった理論家はほとんど存在しないといって過言ではない。

しかし、理論面におけるオリジナリティがそれほどみられないにしても、当書の存在価値はきわめて大きいといえよう。なぜならば、現在の日本の社会心理学の多くは米国依存で、日本での問題の把握や記述があまりにも少なく、エミックな観点が欠如しているものが多いからである。

氏は、心理学系の社会心理学者であると自己規定しつつも、心理学系の長所である研究技法の精密さと、社会学系の長所である問題意識の広さとが統合されることを願っているという。本書も、そのような目的のための試みの一つとして評価できるものである。

いずれにしろ、野村氏の研究は、宗教ならびに俗信や迷信の研究を志す者にとって、先駆的業績の一つとしてきわめて大きな価値をもつものといえることができ、今後の研究成果が一層期待される。

Akira Nomura :
The Social Psychology of Folk Observance

Kenya Numata

This book is valuable because it is one of the rare cases of social psychological studies in Japan that focuses on a particular problem in Japan with an emic perspective. In part I of this book, psychological mechanisms of folk observance are explained on the basis of the accumulated socio-psychological material. Part II is devoted to a study of *Kitsunemochi* as a particular folk observance from an emic perspective which means the attitude of problem seeking from the inward of a region or a culture. Although unfortunately any new theory of the author is found, this book is very convenient for those who want to do some research in the field of religion and folklore as well as folk observance itself.